

第Ⅳ章 調査成果の分析研究

—松本平西山麓における縄文中期文化の研究—

第1節 2号住出土土器の型式学的検討

—松本盆地における中期前葉期の様相—

小口 英一郎

はじめに

2号住から出土した土器群は、その特徴から中期前葉から中葉への過渡期に位置付けられる良好な一括資料である。一方で、当該期は前期後半以来の広範囲にわたる安定的な諸系統が大きく崩れ、中葉期の広域的な土器群の再編へ向う流動的な時期でもあり、本住居出土土器のあり方もそれを裏付けている。

当該期の土器群については、本県において八ヶ岳西南麓から諏訪盆地の資料を中心とした先行研究（数野1984、寺内1987・1988、三上1987）によって整理されてきたが、その実態は本住居が示すように単純ではなく、また近年の北信地域の成果（寺内2000）によって県内の地域的特性が明らかになりつつある。とくに熊久保遺跡はその地理的状況からそれまでの関東地方の繋がりに加え、北陸・越後地方や東海地方の当該期土器群との関連の中で考える必要がある。本稿では、その基礎作業として第Ⅲ章1節で示した分類を基準として、各個体資料の系統別の諸属性および前後関係の検討を行うとともに松本平における当該期土器群の様相を明らかにすることで、地域単位としての編年案を提示したい。

1 2号住出土土器の構成と生成過程

先述したように、第Ⅰ群土器は以下のように分類が可能である。

1類：平行沈線を多用し、平出第Ⅲ類土器に比

定されるもの。

a類：地文に縄文を有する。

b類：地文の無いもの。

2類：B字文・パネル状文様など半截竹管工具によってモチーフが描かれるもの。

3類：指頭圧痕文を有する一群。

4類：横帯区画文が多段化し、区画内に波状沈線や斜行沈線、刺突文が施文される。

5類：口縁部が肥厚し、縄文が施文された一群。

(1) 文様帯構成とモチーフ

1類は中期前葉五領ヶ台式（梨久保式）を構成する沈線文土器からの変遷が明らかにされている（三上1987）。器形は、口縁部が「く」の字状に屈曲して立ち上がり、頸部で括れるいわゆるキャリパー形を呈する。文様帯構成は、口縁部・頸部・体部の3帯からなり、口縁部には4単位の縦位隆線が貼り付けられ波状口縁を呈するものが多い。モチーフは半截竹管による平行沈線もしくは波状沈線がめぐるが、地文に縄文が施されるものと（a種）、無いもの（b種）に分かれる。頸部は縦位の平行沈線と斜格子目文の2者が認められる。

体部文様帯は地文縄文上に平行沈線・弧線状沈線が垂下している。そして、頸部文様帯との境に楕円区画文を施文する。

いずれのモチーフも半截竹管工具と縄文原体によって施文された非常にシンプル装飾であることが特色であり、前期以来の伝統を強く残したものと指摘できよう。

2類は新崎式もしくはその影響を受けたものに

ついてまとめている。とくに第Ⅲ章第9図2・3は後者に位置付けられるが、その構成は単純ではない。

2は口縁部が肥厚し頸部に平行沈線がめぐって胴部との境に1類と同じ楕円区画文が施文される。口縁部が肥厚し、楕円モチーフを有する点は1類に近いが、一方で頸部の半隆起平行沈線や胴部のパネル状文の構成は新崎式の影響を強く受けたものである。

3は肥厚した口縁部を有し、頸部がやや括れた短胴形の深鉢である。口縁部は無文であり、頸部に一条の押引文を施した隆線がめぐる。また、胴部には逆U字状区画文が展開し、その内部に同心円文や弧線文（B字状文）などが充填されている。この胴部の区画文は連結していることが注意され、隣接する隆線が縦に併走してU字状を呈している部分と両者が合流してY字状になっている部分が観察される。このY状部分の存在から、区画文自体は当該地域における前型式のY字状懸垂文が変形した名残と考えられ、北陸方面と当該地域の諸要素が組み合わさった類型であることが想定されよう。いずれにしても2、3は当該地域に求められる既存の型式には比定されないものとして注目される。

3類は指頭圧痕の地文を有することでまとめたが、下記の細分が可能である。

a種：角押文を有する一群（9・13）＝貉沢式

b-（1）種：Y字状文やヘラ沈線によるモチーフがみられるいわゆる「大石式（大石タイプ）」（今村1985、小林1995）と呼ばれる一群（10・11・14）

b-（2）種：指頭圧痕とクランク文のみの一群（12）

a種の9は胴上半が「く」の字状に屈折して、口縁部文様帯が2段の横帯区画文構成となっている。上段には1単位の把手が付き頂部に渦巻文が描かれる。区画内には波状押引文、下段には区画に沿って押引文が充填される。13も大形の胴張り

深鉢形土器であり、口縁部は欠損しているが「く」字状に屈曲して押引文が横走している。胴上半に楕円区画文が描かれ、いわゆるクランク文が垂下している。この楕円区画文内に角押文がみられないことから貉沢式の範疇に入るか戸惑うが、頸部に施文される角押文の存在から、この類型に含めた。

b-（1）種の10は左右非対称の突起を有し、口縁部下に幅広の押引文が横走している。そして、その下段にはヘラ沈線によるY字状文が描かれる。11も同様に1単位の球状突起が貼り付けられ、ヘラ沈線によるY字状文が施文される。14も筒形の器形を呈し、やや開いた口縁部にヘラ沈線が垂下している。この一群は胴部における指頭圧痕文を除き、今村啓爾氏の大石式、小林謙一氏の大石タイプに該当し、横帯区画文や角押文が未発達であることからa種に比べやや古相を帯びている。胴部の指頭圧痕文の多様化は松本盆地の地域的特性といえるかもしれない。

b-（2）種の12は口唇部が外剥状を呈し、頸部に横帯区画文が微隆起線によって描かれているが、角押文はみられず、b-（1）種と同時期と考えられよう。

4類は横帯楕円区画が多段化し、区画内に平行沈線や波状沈線を充填している（第Ⅲ章第12図15）。また、沈線の下端に連続的に刻みを施し、いわゆる角押文が施文されない点などは佐久地方にみられる斜行沈線文土器（寺内 1996）との繋がりを類推させる。

5類は8のみである。口縁部は肥厚し、波状縁となっている。口縁部と胴部ともに縄文施文がなされ、胴部に「l」字状のモチーフが認められる。このモチーフは断面三角状を呈し、隆線上に半截竹管工具による刺突がなされている。また、モチーフの周囲には半截竹管のハラ側によって弧線文等が描かれる。このような特徴を備えた土器については、当該地域では類例が少ないようである。ただし、あえて類例を求めるならば、東海地方の

山田平遺跡において肥厚した口縁で縄文を施す一群が散見される(山下1998)。また、この器形に近いもので、肥厚した口縁部に角押文が施された56・57がある。波状口縁下に円形刺突文を有した土器として西日本の船元Ⅰ式と呼ばれる一群が挙げられるが、本例はそれらの模倣・変容形態といえるかもしれない。

以上の土器群の中から、時期的細分の指標となる3類・5類の型式学的特徴についてまとめると、①ヘラ沈線によるY字文を有し、胴部にクランク文が垂下する3類b種、②角押文・横帯楕円区画文とクランク文が垂下する3類a種、③横帯楕円区画文が多段化し、区画内に波状沈線と沈線下端に刻みを施す4類があり、①は角押文と横帯楕円区画文が未発達であることから古相を帯びることが指摘できよう。したがって、2号住出土土器群は古段階と新段階の2段階区分が可能である。

そこで、次にこれらの土器群を地域別に集成し、当該期における地域的様相を概観したうえで、編年的位置付けについて検討を行いたい。

2 松本・諏訪・八ヶ岳山麓・甲府盆地の様相

当該期における良好な一括資料が得られている遺跡を4つの地域(松本盆地・諏訪盆地・八ヶ岳山麓・甲府盆地)から概観したい(表1)。

<松本盆地の様相>(図1～3)

松本盆地には大きく東山山麓と西山山麓において遺跡が密集するが、これに加え盆地北端・南端に位置する遺跡も注目される。

松本盆地北端に位置する松本市塩辛遺跡、同市矢作遺跡では当該期資料が各系統別に一括資料として出土している。塩辛遺跡41号住(1～4)からは新崎式が1個体出土している(1)。そして、これに伴い指頭圧痕を有し、横帯区画文とクランク文が組み合わさる2、さらに押引文が施された浅鉢(4)が検出している。矢作遺跡5号住(5～10)からは、胴部に輪積痕を残す1類土器の5、さらに斜行沈線文土器である9、角押文を特徴と

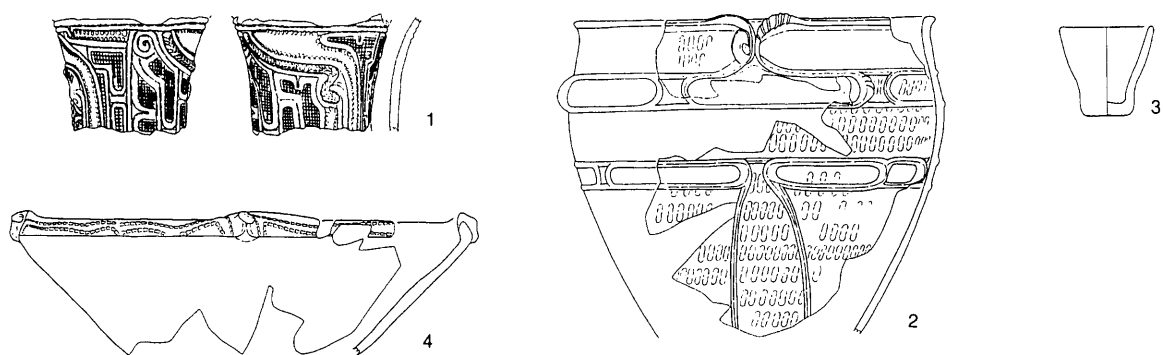
する8・10があり、8は口縁部に重三角文が形成されていることからやや新相を帯びている。6は隆線上の爪形文や半肉彫による波状文や円形文などの文様から北陸系新崎Ⅱ式(加藤1995)に比定されよう。

次に東山山麓をみていこう。松本市一ツ家遺跡66号住(11～16)からは、1類と4類が良好な一括資料として検出されている。11・12は1類平出ⅢA土器であり、13はその変容形態であろう。14は3類指頭圧痕文土器、15はラッパ形の器形に横帯区画文を形成し、角押文と波状沈線が施された4類に比定される。4類の存在から新段階に位置付けられる。

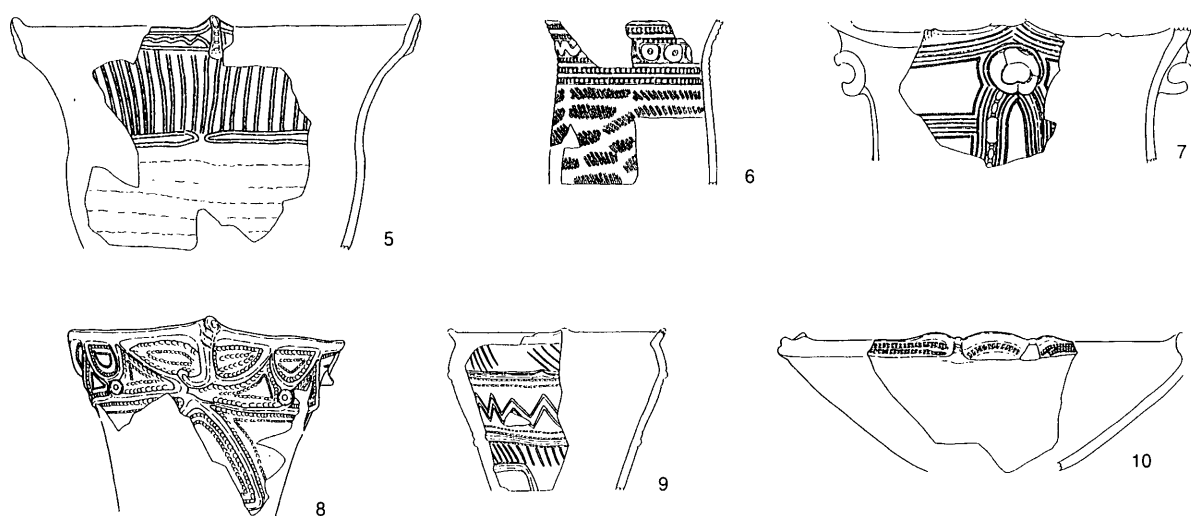
塩尻市堂の前遺跡11号住(17～23)からは17～19の1類、口縁部に棒状貼付文を有し、縦位の押引文を施す21、斜行沈線文を特色とする20、さらに押引文が口縁部に施された浅鉢22・23がみられる。18の平出ⅢA土器の口縁部には上下からの交互刺突文が施文されるが、この文様手法は前型式から継承されたものであろう。

寺内隆夫氏によって同市俎原遺跡103号住資料が紹介されている(寺内1988)。その内容は非常に興味深いものとなっている(24～31)。1類は2点出土し、口縁部に交互刺突文を2条施文する24、さらに押引によって波状沈線を描出する25は本類型の中でも珍しい資料である。その他、円筒形を呈し、口縁部に蓮華文、胴部にB字文を施文した26は北陸系新崎式が在地型式と組み合わせり変容したものであろう。28～30は角押文が施文された3類a種、31は文様帯構成が平出ⅢAと共通しながら、胴部が縄文施文のみの大形深鉢である。以上の土器群の組成のあり方から、2号住新段階に平行するものと思われる。

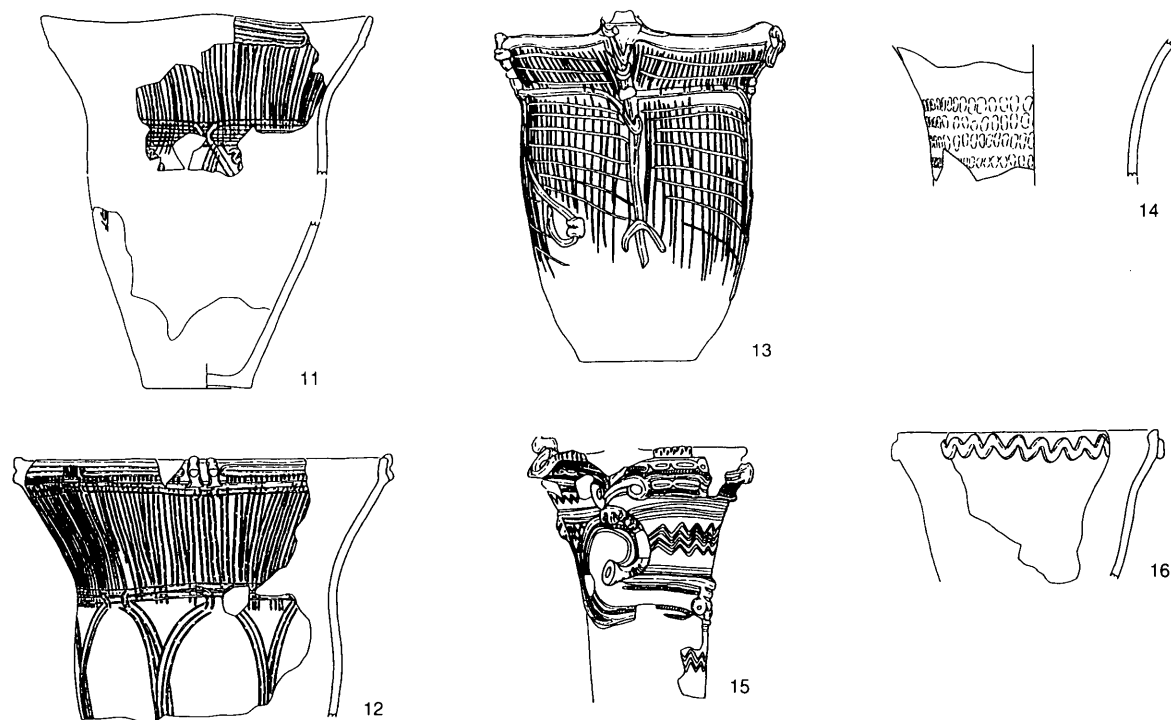
松本盆地南端に位置する塩尻市平出遺跡J-24号住(32～34)からは、1類の33、3類の32、さらに4類に比定される34が出土している。33の平出ⅢA土器は地文縄文がみられず、熊久保2号住5に共通している。32は口縁部に基点となる渦巻モ



塩辛41号住

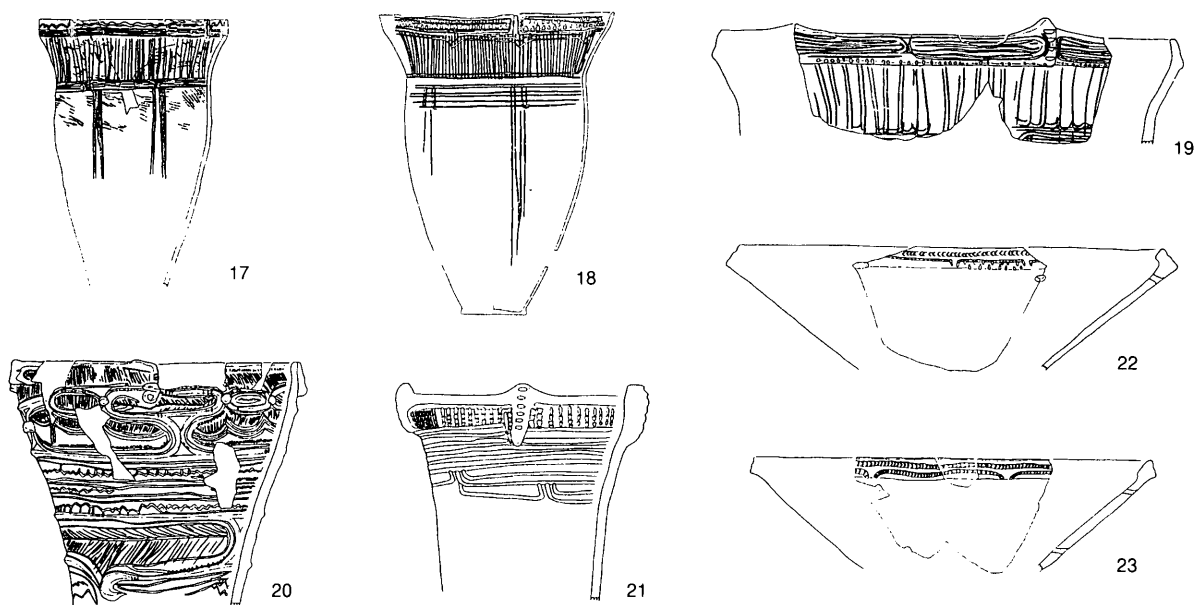


矢作5号住

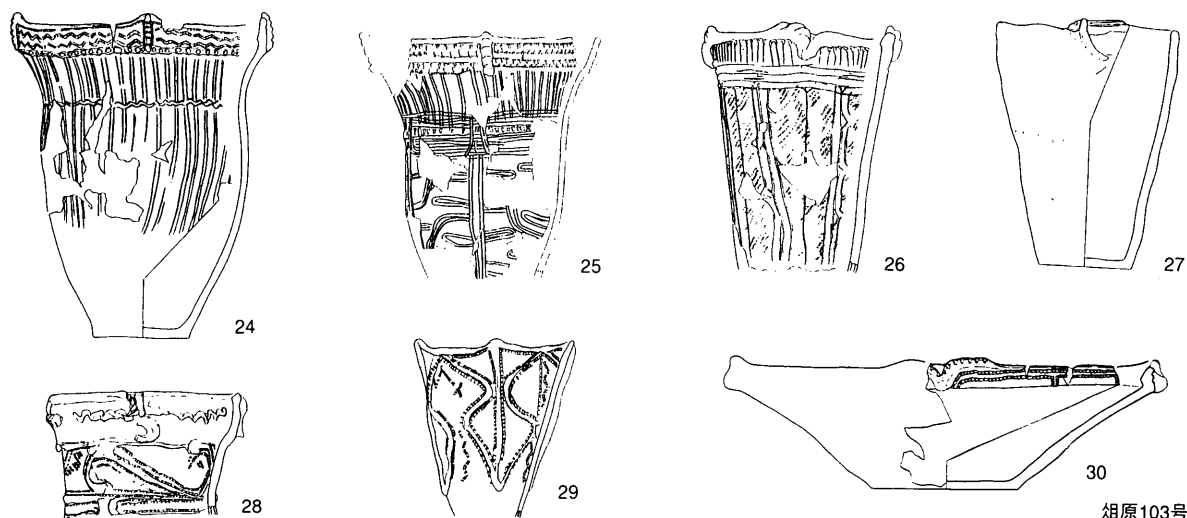


一ツ家66号住

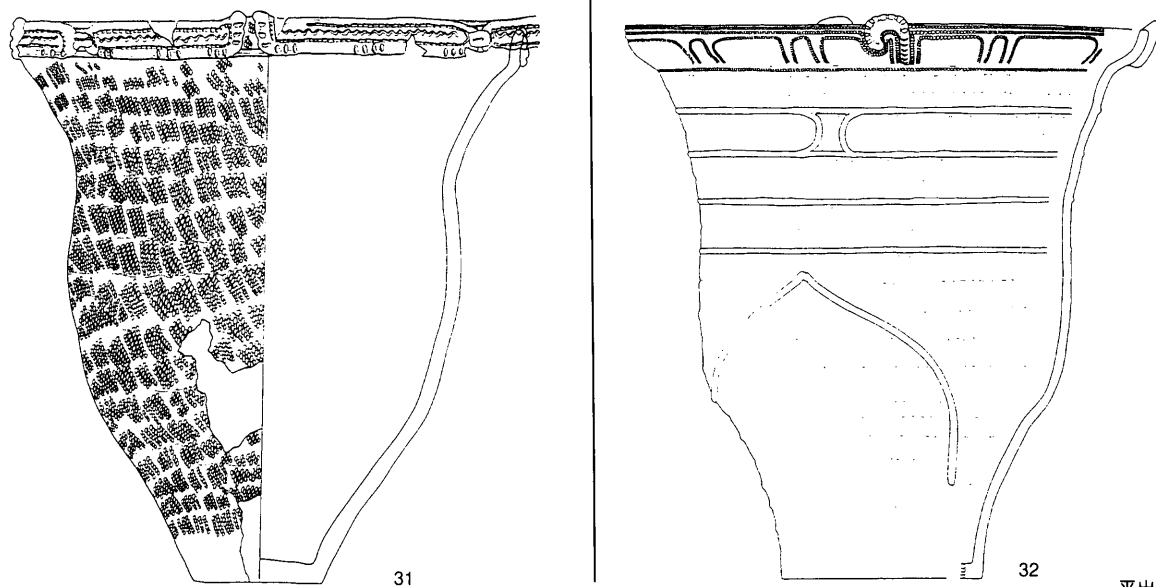
図1 松本盆地出土土器 (S=1/8)



宮の前11号住



俎原103号住



平出J-24

図2 松本盆地出土土器 (S=1/8)

チーフを貼付し、逆U字状押引文が施文される。胴部には1帯の楕円区画文が形成され、さらにその下段に2条の隆線が横走する。34は幅狭な楕円区画を形成し、沈線が充填される斜行沈線文土器であり新段階として捉えられよう。

西山山麓では、山形村殿村遺跡6・39号住から当該期資料が得られている(35~42)。6号住からは1類の36、さらに横帯楕円区画文を形成する円筒形の37、さらに有孔鐳付土器の38が出土している。36の胴部文様はB字文が懸垂文とともに描かれている。39号住ではやや古手の結節縄文を有する39が注目される。先端が割れた波状口縁を有し、押引による横線と縦位短沈線が口縁部に施文されている。40は横帯楕円区画が多段化し、区画内には沈線下端に入れる刺突文や波状文がみられることから4類に該当しよう。41は平出ⅢAである。さらに遺構外ではあるが、3類に該当する35は口縁部に交互刺突が施され、ヘラ沈線によるY字文、角押文による渦巻文などが描かれている。胴部には幅狭な楕円区画とクランク文が垂下している。これは、大石タイプの範疇に入るものとして捉えることができよう。

＜諏訪盆地の様相＞（図3～5）

岡谷市花上寺33号住（43~47）は、五領ヶ台Ⅱ式の最終段階に帰属する37号住と重複して当該期土器が出土している。43は1類の平出ⅢA土器である。口縁部には棒状貼付文が貼付され、その間隙に平行沈線がめぐっている。胴中位に楕円区画文が簡略化した平行沈線がめぐって上下に分帯を行い、上半には縦位沈線、下半には逆U字文が細沈線で描かれている。

これに伴って波状沈線とクランク文が懸垂する44がある。観察項目には整形として指頭圧痕が残存しているとあるが、波状文の存在から4類に該当する。45は口縁部に交互刺突文がめぐり、幅狭な横帯楕円区画文が4段重畳している。区画内は波状沈線や刺突文が充填され、さらに胴部には懸垂文がみられ、その間隙にB字文や波状沈線が描

かれている。横帯区画文の形成や胴部のモチーフなどから2類と4類の折衷タイプといえよう。46~47は浅鉢であり、内折した口縁部に角押文による逆U字文が施文されている。

岡谷市梨久保遺跡では、当該期に帰属する14・113・117号住出土土器をみていきたい。14号住覆土上部からは大量の土器が出土しているが、その時期幅も長く、ここではその前後のものを除外した。55は1類の平出ⅢA土器である。この変形タイプとして56があり、口縁部文様帯が上下隆線によって画され斜格子目文が充填される。58・59は2類の胴部に縦位区画文を有する一群である。58の口縁部突起は第Ⅲ章第9図4の平出ⅢAに類似した構成になっている。いずれも新崎式の変容形態として捉えることができよう。65~68は指頭圧痕を有する一群であり、65は口縁部に4単位の棒状貼付文がみられ、そこから渦巻状モチーフが垂下する。この懸垂文脇に角押文が併走していることが特徴であろう。66は寺内隆夫氏によって提唱されている斜行沈線文土器（寺内1996）に該当する。4単位の円形突起が基点となって、横帯楕円区画文が3段形成され、区画内には斜行沈線や波状沈線が充填されている。以上の土器群はいわゆる大石タイプが認められないことが重要であり、熊久保遺跡2号住新段階として捉えられよう。

茅野市棚畑遺跡では、117・147・152・156・157号住から当該期資料が得られている（76~85）。117号住では、口縁部に方形区画が形成し、区画内には縦位の角押文が充填、胴部にはクランク文が垂下している76が認められる。152号住からは1類の81とともに2・3・5類が破片資料として得られている。156号住（82~85）からは、5類の82、さらに埋甕炉である85の平出ⅢAなどが認められる。147号住（77~80）では、桶形の器形を呈し横帯区画と角押文が多用される80、いわゆる「深沢タイプ」（寺内2000）とされる78、77は簡略化された平出ⅢAであり、156号住85よりも新しい。147号住は156号住と重複関係を有し、156号住が古く

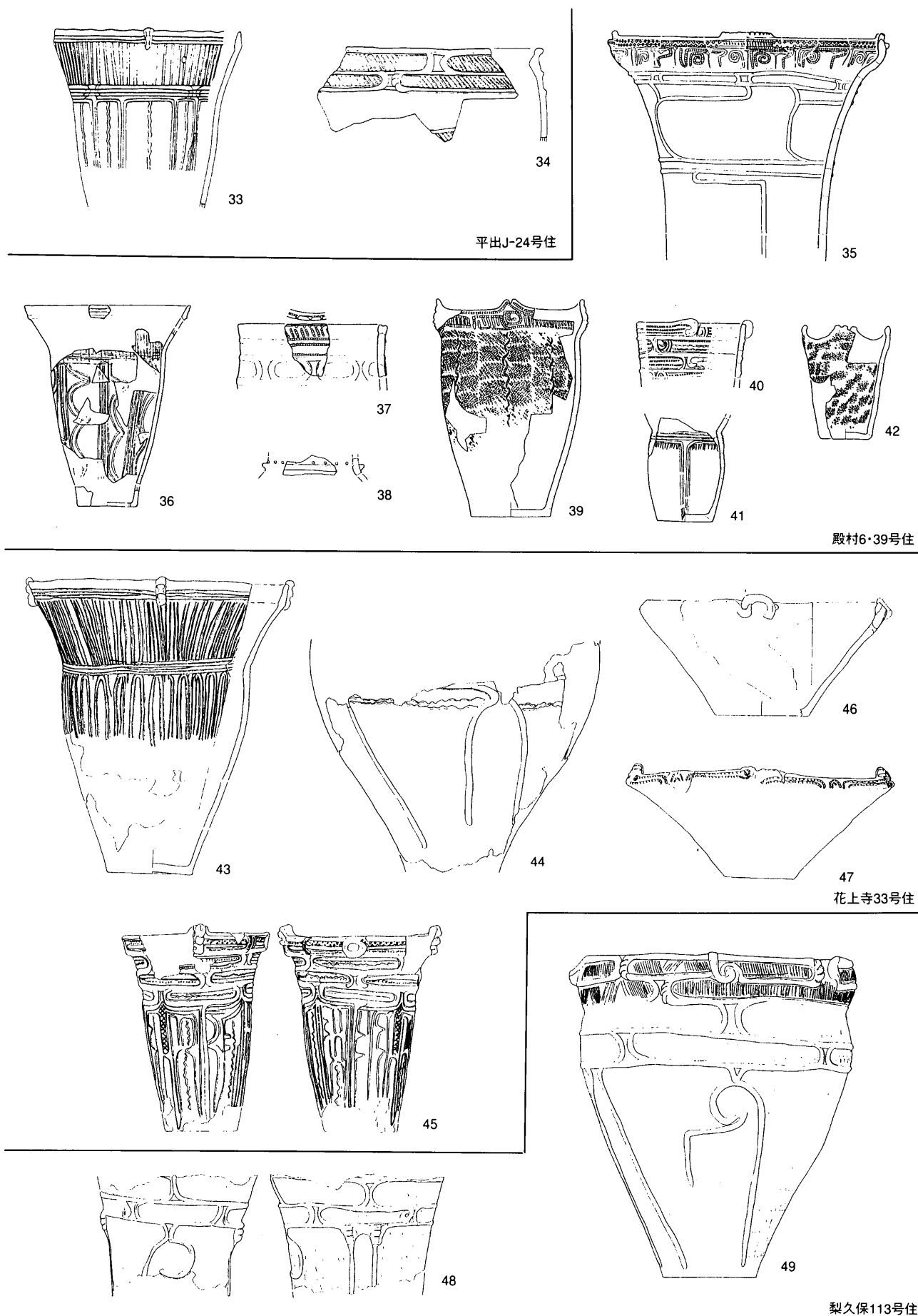
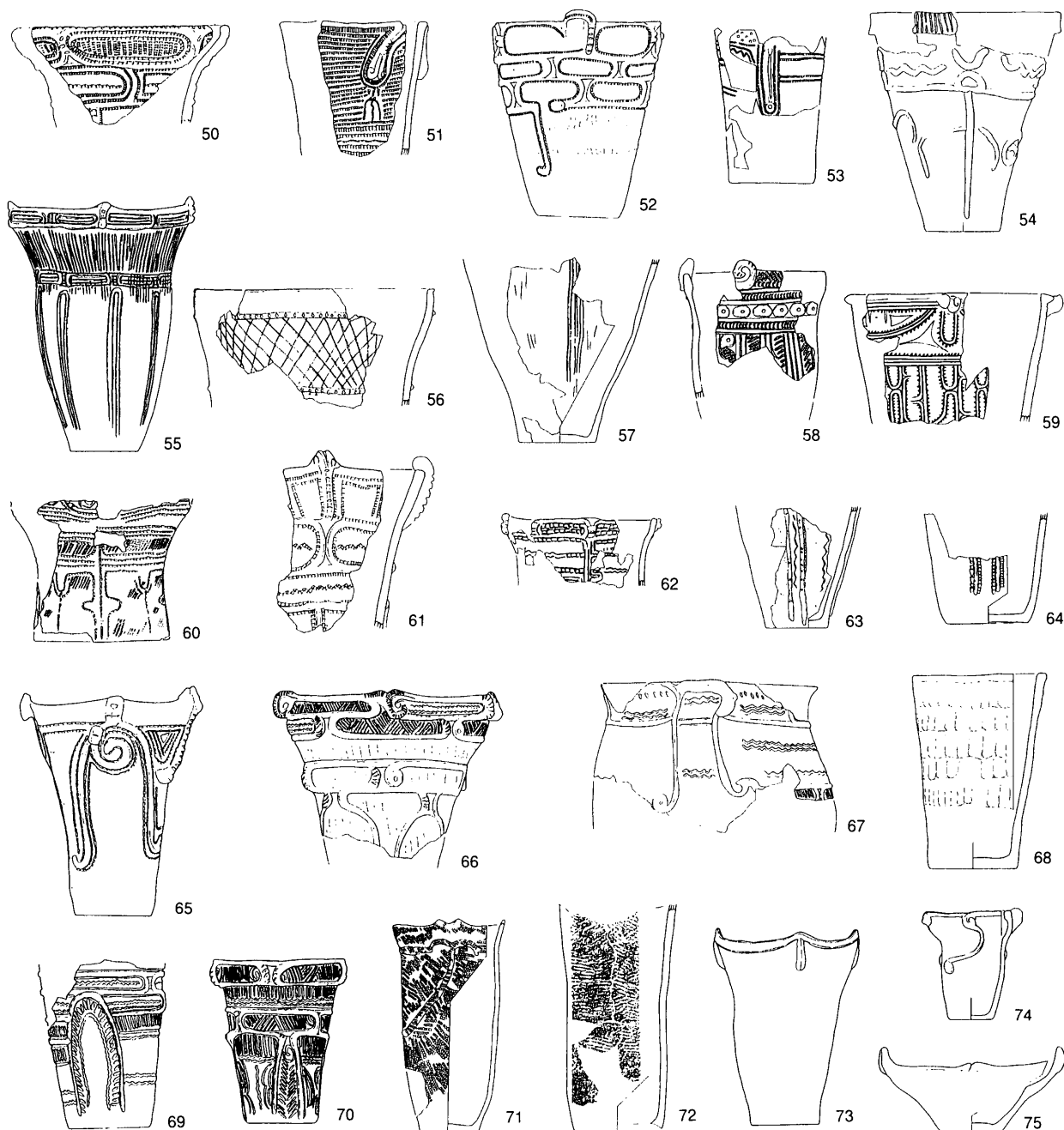
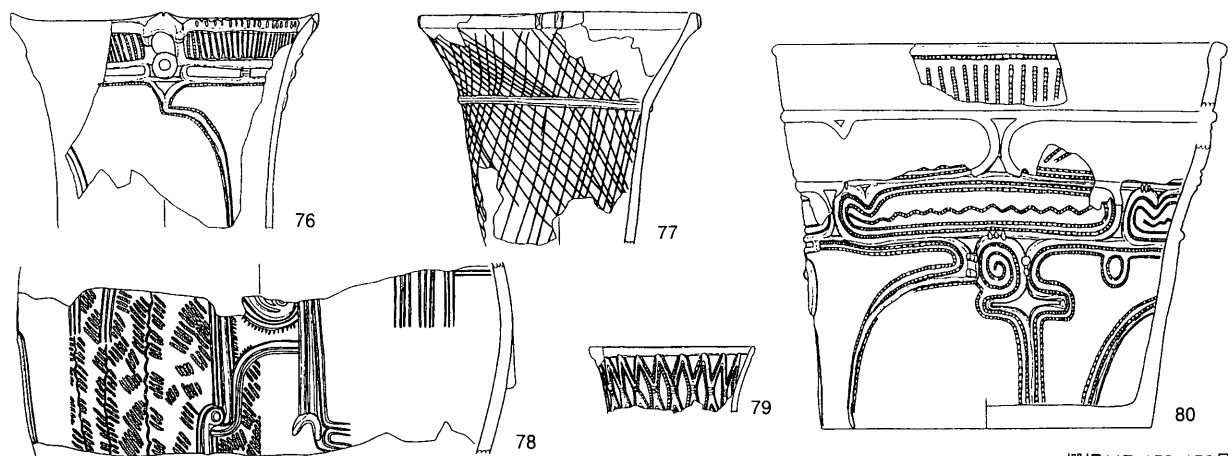


図3 松本・諏訪盆地出土土器 (S=1/8)



梨久保14・113・117号住



棚畑117・152・156号住

図4 諏訪盆地出土土器 (S=1/8)

147号住が新しいことから、以上の土器群の変遷を裏付けている。

＜八ヶ岳山麓の様相＞（図5）

八ヶ岳山麓では茅野市判ノ木山西遺跡(86～93)、原村大石遺跡において当該期資料が充実している(伴1975、百瀬1981)。判ノ木山西遺跡では猪沢式から新道式期における住居跡がまとまって検出され、その中でも当該期の一括資料が得られている3・4号住をみていきたい。3号住86は平出ⅢA土器であり、87・88は角押文を多用する猪沢式である。とくに87・88は横帯楕円区画が確立し、区画内に波状文や斜沈線を充填するなど、新段階に位置付けられよう。4号住では89～91の平出ⅢA、92・93の猪沢式が認められる。以上の土器群は、熊久保2号住新段階に並行するものと考えられる。

その他、八ヶ岳山麓では大石遺跡16・22・23号住から1類と3類が良好な一括資料として出土している。1類が主体を占めるものの、それに伴い口縁部の方形区画文内に縦位・斜行押引文が充填され、胴部に楕円区画文を2段配した3類a種や阿玉台Ib式が共伴している。22号住では、胴部に縦区画文を有する新崎式がみられることも注目される。

＜甲府盆地の様相＞（図5～7）

やや距離を置くが甲府盆地における当該期の良好な一括資料が報告されている(小林2001)。勝沼町宮之上遺跡6号住であり、五領ヶ台式直後の猪沢式最古段階から中段階と位置付けられている。ここでは、大石タイプの存在を指摘した上で、それと類縁的なサブタイプである「宮之上タイプ」が設定される。口縁部に波状文とY字状印刻文などを有する「宮之上タイプ」は胴部が無文であることも大きな特徴となっており、この点は松本盆地において指頭圧痕文が多い状況と大きく異なるようである。また、何よりも興味深いのは同時期と考えられるこれらの土器群の中で、「平出ⅢA土器」がみられないことであろう。一方、宮之上遺跡では、111～113にみられる横帯楕円区画文と

クランク文を指標とする猪沢式が認められるが、これは熊久保2号住9と類似している。つまり、八ヶ岳山麓を中心とする大石タイプと甲府盆地にみられる宮之上タイプ、さらに後続する狭義の猪沢式が組成の主体となることが本地域の特色であることが指摘できるのである。

3 2号住出土土器の型式学的位相

2号住出土土器の組成の特色として、前葉期の五領ヶ台Ⅱ式(梨久保式Ⅱ段階)に隆盛する縄文系土器の弧線文を有する一群が伴わないことであろう。多くの遺跡で両者が共伴関係を示し、これまでは型式学的な検討による細分が多かった。例えば、岡谷市船霊社遺跡11号住では縄文系土器とY字状印刻文、さらに角押文が施された土器群が共伴している(図8)。12は3類に縄文と角押文が施文され、また13は口縁部に角押文が縦位に施文され、胴部にクランク文が垂下している。さらに14は地文の持たず波頂部に渦巻文とクランク文がモチーフとなったもので、これらの土器群は1～11に代表される縄文系土器より後出的である。このような土器群は、これまで五領ヶ台直後型式もしくは最終段階に含める考えが提示されてきた。代表的なものとして、三上徹也氏(1987)、小林謙一氏(1995)の編年案がある。

三上氏は梨久保式Ⅱ段階を構成する縄文・沈線文の2系統の土器群について、それぞれa～cの3段階に細分し変遷案を提示している。最終段階であるⅡc段階の特徴として、①口縁部に施文される半円弧文が沈線から隆線へ変化する、②胴部文様のY字状縦位隆帯文の上端が肥大化する、③口縁部文様帯にT字状文が密に入り、胴部文様帯にクランク状隆帯文が入る、④技法的に若干の連続押引文が使われる、に大きくまとめている。この③・④の特徴については本段階のバラティーと捉え③のいわゆる「大石式」についてはⅡc段階に比定し梨久保式の範疇のなかに含めて捉えている。

一方、小林謙一氏は五領ヶ台最終段階をCSⅡb

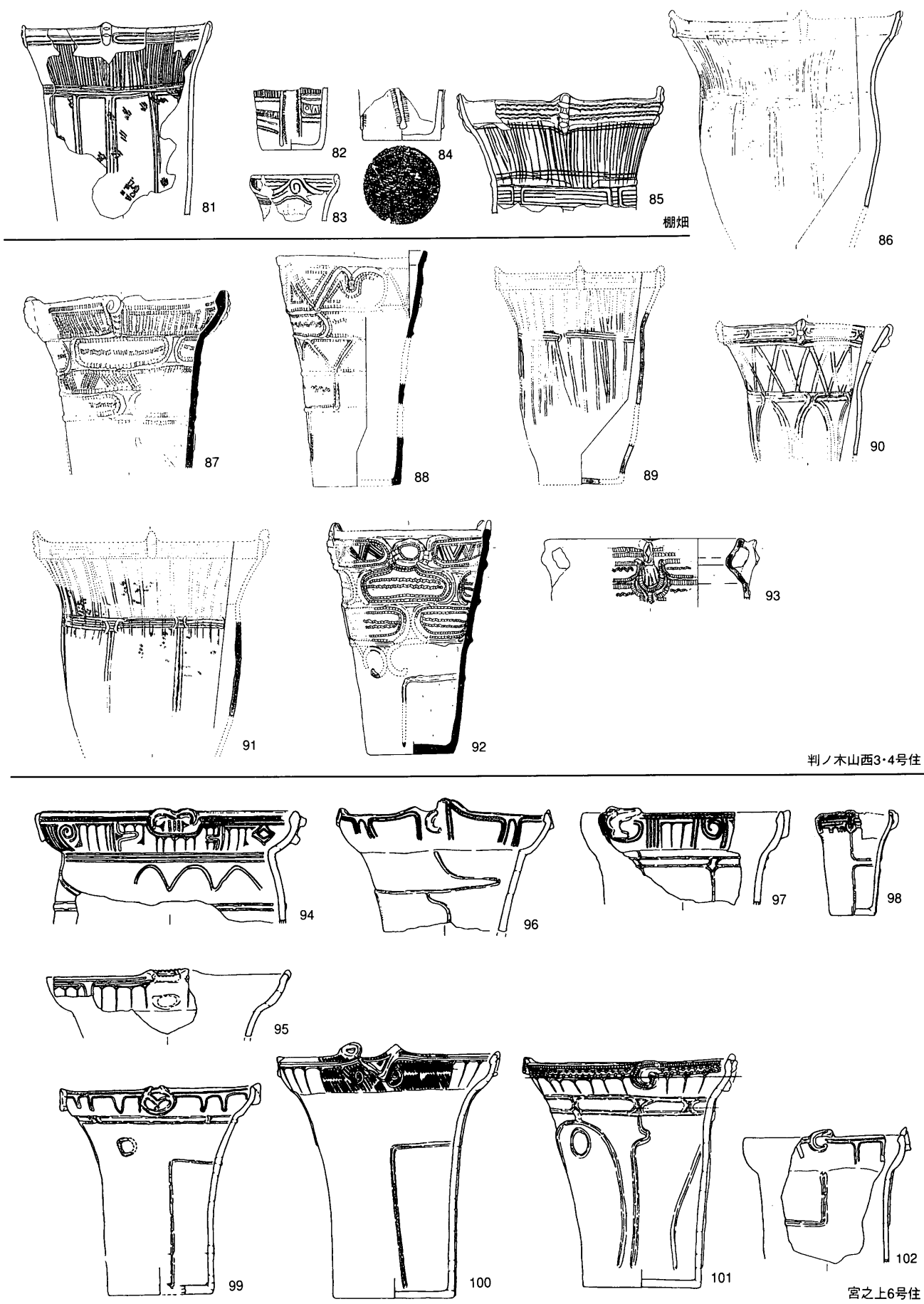
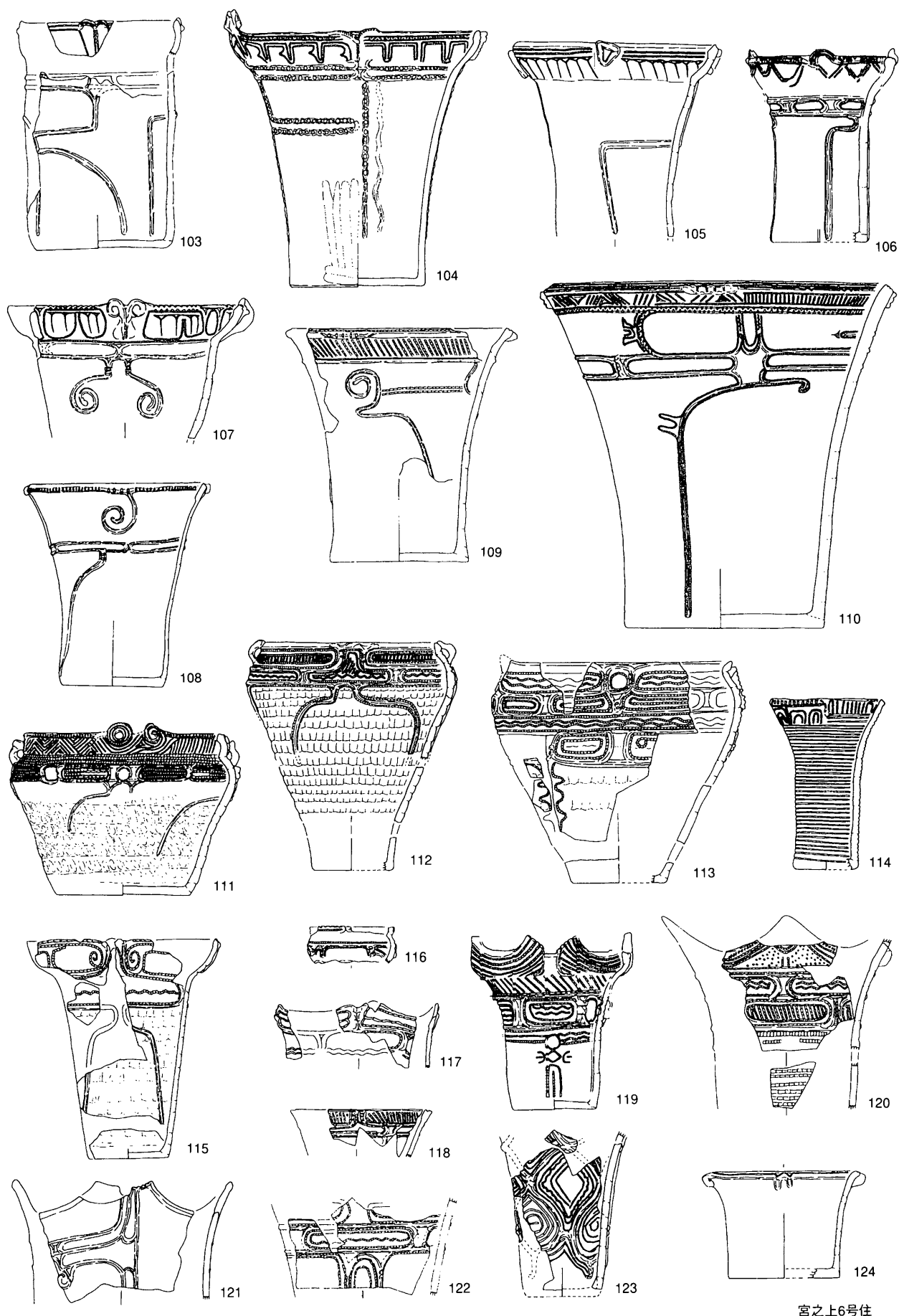
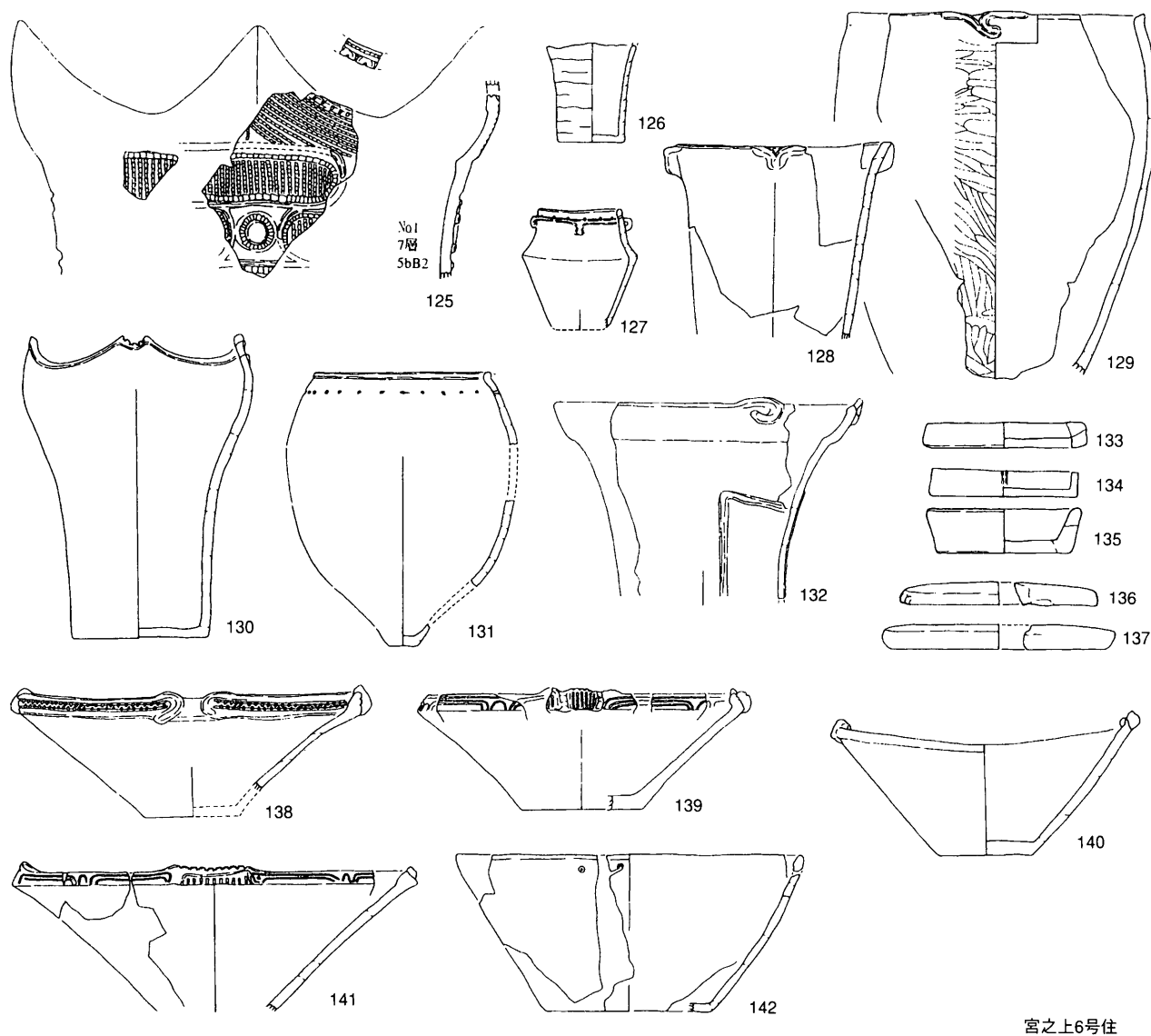


図5 諏訪盆地・ハヶ岳山麓・甲府盆地出土土器 (S=1/8)



宮之上6号住

図6 甲府盆地出土土器 (S=1/8)



宮之上6号住

図7 甲府盆地出土土器 (S=1/8)

期、次期をCZⅠa期として設定し、宮之上6号住資料を猪沢式最古段階(CZⅠa期)から中段階(CZⅠb期)に位置付け、五領ヶ台式から切り離している。これは「連続刺突文技法」の成立(小林1995)を指標として段階区分を行っていることが大きな理由と考えられる。

熊久保遺跡2号住出土土器については、3類b種を五領ヶ台式に含めるか猪沢式最古段階に含めるかは別として、弧線文

を有する縄文系土器とは切り離して独立した段階として設定が可能である。さらに猪沢式である3類a種と在地の系統である平出ⅢA、さらに北陸

表1 熊久保遺跡2号住段階出土土器遺構一覧表

	松本盆地	諏訪盆地	八ヶ岳山麓	甲府盆地
古段階	内田雨堀B号住 殿村6号住 矢作5号住	花上寺33号住 梨久保14号住 棚畑152号住	大石7・16・18・22号住	宮之上6号住
新段階	塩辛41号住 一ツ家66号住 俎原103号住 堂の前11号住 平出J-24号住	梨久保113・117号住 梨久保390p 棚畑156・157号住	大石21・23号住 判ノ木山西3・4号住	宮之上6号住

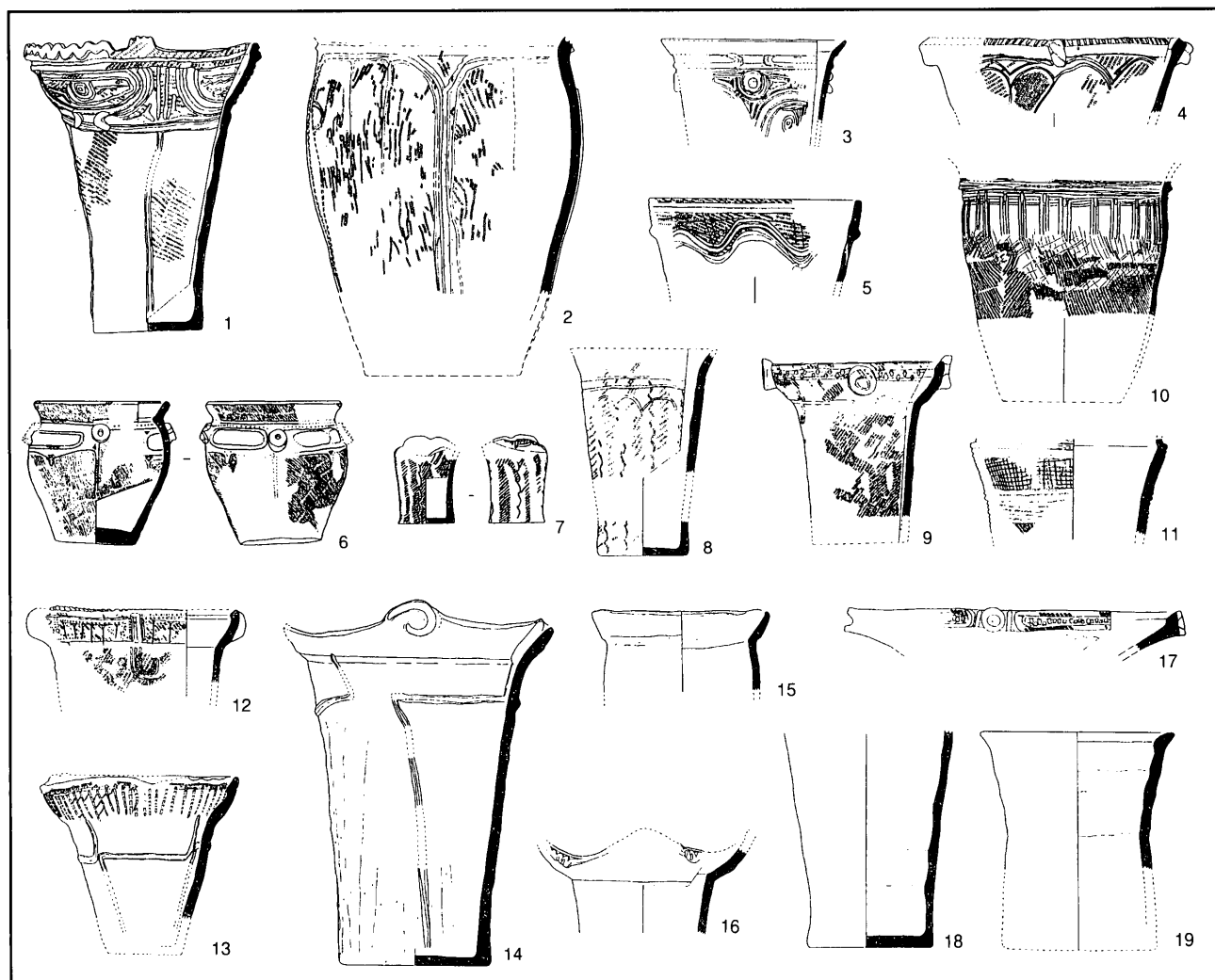


図8 岡谷市船霊社遺跡11号住出土土器 (S=1/8)

系の変容タイプの2類が共伴関係を示していることから、既成の編年案に基づけば貉沢式の古～中段階に位置付けられよう(表2)。ただし、これらの類型が貉沢式ではなく、独立した系統を有する土器群としての位置づけが必要であるが、型式として昇華できるまでには、さらに資料の増加を待たなければならない。その際に重視しなければならない点は、深鉢のみの器種から構成される平出皿Aに浅鉢などの他の器種が存在するかであろう。各地域の資料を概観したように、平出皿Aに伴う浅鉢は、角押文を施したものが圧倒的に多いのである。2号住では、口縁部に楕円状の隆線がめぐって、縄文が施文される浅鉢が1点出土している。本来この隆線間に波状文が施されるものが一般的であるが、本例はそれが省略化されてしまっ

ている。この浅鉢が在地の系統を有するものかは今後の課題としたい。

松本盆地における当該期の系統別組成として、1類と2類、さらに3類a種、4類が加わってくる特徴を有する。しかしながら、八ヶ岳山麓から甲府盆地においては3類a種が主体型式として安定的な組成となっていく状況が読み取れ、横帯楕円区画文の重畳化と角押文の多様という共通要素が広域的な拡がりをもてるのである。本遺跡の特性として、2類の北陸系土器とその変容タイプの存在を挙げることができるが、この背景には西山山麓という地理的な条件も見逃すことはできない。北陸方面との繋がり、糸魚川ルートとともに木曽谷を介した飛騨山脈を越えてのルートも想定され、今後は飛騨地方との関わりを検討する必要がある。

表2 中期前葉編年案の対比表

本 稿			2 号 住	
			古 段 階	新 段 階
小 林 (1995)	CM	CS	CZ	
	I II	I a I b I c II a II b	I a I b	II a II b
三 上 (1987)	梨久保Ⅰ段階	梨久保Ⅱ段階		猪 沢
		II a II b II c		
今 村 (1985)	五領ヶ台Ⅰ式	五領ヶ台Ⅱ式	神谷原 大 石	猪 沢
	I a I b	II a II b II c		

あろう。さらに、松本盆地は佐久地方との繋がりが強く、北関東経由での土器伝播のあり方が地域的特性の解明に重要な意味をもつと考えられる。

おわりに

2号住出土土器は、松本盆地における中期前葉末から中葉前半に至る明瞭でなかった本段階の資料を新たに補充することになった。そして、型式

の転換期である当該期の複雑な様相を追認するものともなった。そのような意味では、熊久保遺跡における人・モノ・情報の交流が他地域にもれず広域的に大きく反映されたものといえよう。筆者の力量不足により、本論が当該期土器群の集成的側面に偏ってしまった点を反省し、今後も松本盆地における地域的特性を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- 今福利恵 1999 「山梨県内の五領ヶ台式土器」『山梨県考古学論集』Ⅳ
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学考古学研究室紀要』4
- 数野雅彦 1984 「角押文土器の研究」『丘陵』10
- 加藤三千雄 1995 「北陸における中期前葉の土器群について—新保・新崎式土器—」『第8回縄文セミナー—中期初頭の諸様相—』
- 小林謙一 1995 「南関東地方の五領ヶ台式土器群」『第8回縄文セミナー—中期初頭の諸様相—』
- 2001 「勝沼町宮之上遺跡6号住居跡出土の中期前葉土器について—猪沢式土器成立期における地域的タイプとしての宮之上タイプの仮説—」『山梨県考古学協会誌』12
- 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』8
- 1987 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ—型式変遷における一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 1988 「埴原遺跡出土土器の検討—松本深志高校地歴会発掘資料の再実測を通して—」『平出遺跡考古博物館紀要』5
- 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究—『後沖式土器』の設定は可能か?—」『長野県の考古学（長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ）』
- 2000 「1 中期前葉の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財報告書24 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—縄文時代編—』
- 伴 信夫 1975 「大石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告—茅野市・原村その1・富士見町その2—』
- 三上徹也 1987 「梨久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1
- 百瀬長秀 1981 「判の木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告—茅野市・原村その3—』
- 山下勝年 1998 「知多半島における中期前半東海系土器—山田平遺跡出土土器の分類と編年を中心として—」『第5回東海考古フォーラム・静岡県考古学会シンポジウム97 縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷式土器の成立と展開』